

特41

756

野吉

256

237

特41
756

野守

霧は露をまじへて
夜は玉を
月影は羽乃如黒山よ
る

霧は露をまじへて
夜は玉を
月影は羽乃如黒山よ
る

まはる宿よ此度
草枕くみ
床乃眠も今さら

44. 3. 21
内交

「一」
に。多。く。後。の。月。は。敷。き。の。西。へ。り。魚。の。是。
東。は。大。和。國。は。遠。は。き。り。く。急。使。
程。よ。新。の。ま。る。く。入。里。お。き。て。人。を。待。て
け。あ。り。の。り。の。前。の。も。き。る。ね。ま。ち。の。の。
上。三。三。三。
日。野。の。ま。る。く。出。て。く。み。き。り。
今。い。く。ほ。ど。を。看。察。し。て。日。見。よ。り。く。
ま。る。く。人。の。出。春。日。野。の。年。と。經。て。

ふ。ま。り。通。る。里。お。き。く。野。お。り。翁。よ。
て。の。ま。り。有。る。も。き。り。方。行。は。ま。の。
色。に。ま。り。の。山。は。長。閑。さ。く。五。重。唯。
識。乃。秋。の。風。春。日。の。里。よ。に。と。づ。れ。く。
滅。よ。撫。ひ。ま。さ。な。る。も。神。の。ま。り。く。
の。ま。り。の。ま。り。の。ま。り。の。ま。り。の。ま。り。の。ま。り。
の。ゆ。く。行。敷。あ。み。ぐ。あり。唐。土。よ。

聞えあるは宮寺をなすたるの
上毒 忍む仲磨を我日本を思ひや
王あまた息なりあきかるとあが光
くお三笠乃山陰月を照れん
卯若月あまを照るくあ良はあ
表日長国寺敷交はく
是ある老人の事ぬ我の事なる

何の事ぞ
乃人う
野守さる
是にあり有きの水乃流さぬれ
あまのう
水さく
と反行と申したる事さるぞ

物^{ニテ}はあつたつておぼさる。お夕影とていつ
またよま。野さの鏡と申す。又滅乃
野さの鏡といひう。鬼神の持ちぬ
鏡と社ありぬ。く作入^保行とて鬼神
乃^{モテ}おくる鏡とて野守の鏡といふ。そ
も^{シテ}うけおとほさる。鬼乃有り。が昼
き^テんとあつて。洗野と守りよ。おの

鬼とぬき見たる。塚は住まると也
されば野守さける。鬼乃もち^カか
あま^カばやま。野守の鏡と申す。又
謂^カさまけぞ。た^カらや。極は洗野。
ま^カまお。鬼は操^カを。野守の鏡と
いふ。又^{シテ}野さ。敷とて。のき。氷。野
ま^カ野守の鏡と云事。兩^{早カ}旅^カ行^カき

毛譯あり 野守が昔も今
毛義のさくらばのまきり 御覧せよ
青のまきらるる野より水鏡く
歌をうめしむあはれはなま
水乃鏡をかくまらむら 我ぞ
哀しむげも志をて毛甲斐のら
まらうまの路も乃鏡え事毛

年ふと世の物やかくいふ申
御さるの御者鷹乃路も乃鏡を讀
きたもげ水は付く事事にく
毛申す一あらば御物語久
昔は野よは將乃有に御磨をう
一あひ給はるる此方とは事有

ろろと便さく鬼神のまじりける塚の
前まじり肝膽をさすまじりのこまじり我
年頃の塚とつゝあるそは法なる真あら
ハ鬼神の明鏡あらむと我は奇
持と刀をさすや南無釋依佛毎言はテ上有
我や天地を動け鬼神を感ぜぬ
去去砂山行草木去 正正成道乃法味

まじりて解言上日上鬼神は横道黒くなく
野寺の鏡のあらむなり解言正正なりやう
あひかやく鏡のあまてまうける鬼神
目眼のまじり。面をむくむる様ぞゆさ
目まじりぬらぬらと鬼神の塚より
あまて早あがらう鬼神の夜
あまてあまてはたの鐘 時はら

256
237

不製複



發行兼
印刷者

京都市上京區三条通美屋町東北角

檜

常之

(特電話二重)
(振替野金六院三)



訂正者 觀世清



明治世二年六月廿五日從
出版御届濟
同 世四年一月廿八日迄
同 四十三年四月廿五日從
再版
同 四十四年十月廿五日迄
同 四十四年三月十五日別製本御届

乃ら志やぐの屋鏡杖乃ねとく
を刀をたると相とそ鬼神は横道と
をまはし明鏡乃實をれ其の地獄と
帰るがとて大地とをいふと澤あら
志大地の屋ととをいふとやうに
乃底よぞ入よる

